ヤマハは、音楽と、ギターという楽器と、
全感覚で向き合っています。

YAMAHA ACOUSTIC GUITAR PHILOSOPHY

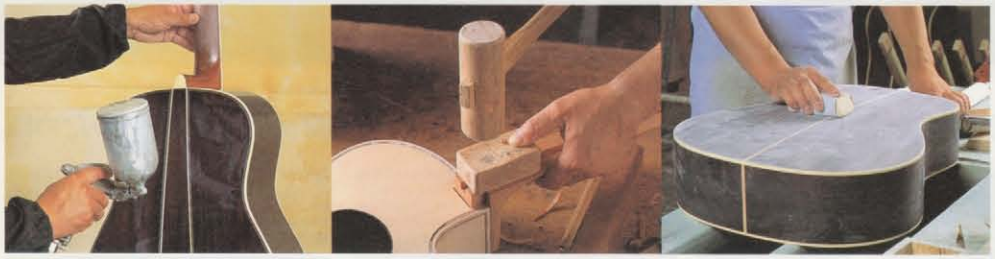
低音は低音らしく、高音は高音らしく、
しかも"全体的に鳴る"ボリューム感のある音を――。
言葉にするとただこれだけのことですが、ヤマハアコースティックギターは
もうほぼ半世紀もこのことに挑みつづけています。それは、
ギター製作の難しさと面白さ、いわば永遠のテーマがそこにあるからです。
内外のアーチストに愛用されるのもそのためと自負しています。
アコースティックギターにおいては、進化ではなく深化。
あらゆる奏者のサウンドイメージを触発する表現性のある音は、
音楽への愛情、ギターという楽器に対する夢と理解、
そして、超絶的な技と感覚の伝承と鍛錬という、3つのエレメントの、
どの1つが欠けても生み出しえないことをヤマハは経験的に知っています。

手は技を記憶している。

いいものを追求すると機械だけには頼れないとクラフツマンは言います。ノミ、カンナの一削り。タンポや刷毛の一刷り。それは的確に道具が使えるかどうかで決まります。「勘でやったほうが精度が出る」と言えるまでの技は、鍛錬を積むことで徐々に手が記憶してきたものです。「われわれがカンナを1回引いて出るカンナ屑の厚みはコンマ1㎜。それがモノサシだね」とクラフツマンは言い切ります。

手は木と対話している。

いい技は、いい材料、いい木を求めます。木地・木目を見て性質を見抜く。握ってみて強度や弾力性をつかむ。響きはどうかを叩いて確かめる。ピアノづくり100年以上の経験をもとに設けられた厳格な選択基準をクリアする良材を、一点の迷いもなく選び出すクラフツマン。「材料が悪くても技術で多少はカバーできる。でもそれは根本的に間違いである」ことを経験的に知っているからです。そして、仕上げに至るまでのすべての工程でつねに木と対話しながら仕事を進めます。



手は音を構築している。

クラフツマンの手は、1本のギターをつくるたびに、削り・貼り・組み込み・塗りの1つ1つを微妙に調整しながら、気長にじっくりと狙った音を構築していきます。その中でもネックの接合は神経を注ぐ工程の1つ。「棹入れは、ギターに命を入れる工程」だからです。「早く仕上げようと思えば方法はいくらでもある。しかし焦っても何も生まれない」この言葉にヤマハアコースティックギター・クラフトワークの真髄が語られていると言っていいでしょう。